

博物館 Dictionary No.236

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

てんじ 展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。 かいせつ

密教図像でまなぶ、 昔のコピー技術

みな 皆さんは、「絵師」というとどんな仕事を思い浮かべますか。芸術作品を生み出す人、でしょうか？でも、昔はそれだけの役割ではありませんでした。

たとえば、国が中国などの海外に使いを派遣したとき、現地の情報を伝えるために、絵師を同行させました。今の新聞やテレビのカメラマンと同じ役割を担っていただいたのです。

また、絵でないと伝えられない情報もあります。その代表が、仏教の図像です。密教は、願いによって仏様や祈りの捧げ方がこまかく区分され、手順も決まっています。とくに、仏様の姿は、間違えてはいけませんし、言葉では説明がゆきとどかないため、正確なコピーが大切になります。仏教の本場のインドから新しく中国に伝わった仏様の姿を正しく日本に伝えることが、中国に留学したお坊さんの大切な目的の一つでした。今と違って、海外に行くのは大変でしたから、日本にもたらされた貴重な図像はあこがれの的で、それを持ち帰ったお坊さんも尊敬されたのです。また、その図像をさらにコピーして学んだのです。

そのため、コピーの技術が発達しました。お手本を横において写す「臨写」、お手本と紙を重ねて透き写す「影写」が基本です。臨写より影写の方が正確なものができます。

影写の場合、下に置いたお手本がよく透けるよう、光にかざしたり、薄い紙を用いたり、紙に油を塗って半透明にする工夫などが行われました。

光にかざすのは、もっとも原始的なコピー技法です。昔は、中国・日本の絵はキャンバスを立てて描くことが多かったので、難しい技術ではなかったのです。

薄い紙を用いるのも原始的な技法で、日本では雁皮紙があります。普通、和紙は楮から作られるのですが、雁皮紙はガンピ（雁皮）から作られる和紙で、薄くしなやかで丈夫で、トレーシングペーパーとしては最適です。

ところが、この雁皮紙は、高価なうえ湿気を吸いやすく、巻物などとして保存するには不向きなものです。



図1 重要美術品 胎藏界外金剛部図像(部分)
鎌倉時代 建久7年(1196)
京都国立博物館蔵

そこで、楮の紙を前提にコピー技術が発達します。紙が濡れると透けますが、これは光の屈折率が変わり、紙の繊維の乱反射を減らすからです。ただ、水では墨がにじんでしまいます。そこで、油を使ったのです。油紙では、墨の線を弾いているのが確認できます。ただ、油でも乾かないといけません。そこで、荳胡麻を原料とした荳油や桐を原料とした桐油などが使われました。黄色に変色しているのは、荳油を用いたのでしょう。

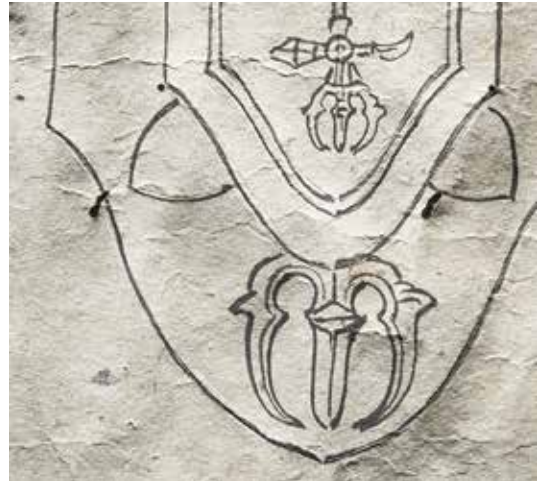


図2 護摩壇壇形図像(部分)
鎌倉時代 13世紀 京都国立博物館蔵

油は紙全体に塗るときもあれば、必要な部分だけに塗ることもあります(図1)。

また、中国の文献では、蜂の巣から取れる蜜蝋を使ったという記事があります。つまり、パラフィン紙です。効果は油紙とは変わりませんが、日本での確実な使用例は知られていません。

しかし、話はこれですみません。鎌倉時代前半、十三世紀半ば以前は、紙はまだ高価なものでした。こういう時代では、使用した紙の裏面を用いた反故紙や、リサイクルした宿紙を用います。特に宿紙は、墨の色が混じった灰色でごわごわしており、影写に向いていません。

そこで、一つの解決方法として、角筆が使われました。紙の上にお手本を置いて、お手本の線を先のとがったものでなぞるのです。下の紙がへこみますので、それを墨の線でなぞります(図2)。昔は、照明に灯明を使っており、斜めから光をあてるとへこみに影ができるので、意外と簡単で便利な技法でした。が、この方法には大問題があります。お手本が傷むのです。ですから、お手本自体が貴重な図像では少数派の技法で、紙の生産力が高まり値段が下がっていく鎌倉時代後半からは、廃れていきます。逆に、宿紙に角筆を使っていれば、鎌倉時代前半より昔に作られていたと予想もつくわけです。

これらコピー技術があれば、素人でもそれなりに形はコピーできてしまいます。ですから、コピーの技術も大切ですが、最終的には線の美しさが絵としての見栄えを左右しますので、ここでプロと素人の違いを見分けていただきたいと思います。

(美術室 大原 嘉豊)